

記号学と百科全書——ミシェル・セールにおける記号論的 ヴィジョン

高橋 輪（慶應義塾大学大学院文学研究科哲学・倫理学専攻哲学分野 修士二年）

発表要旨：

現代フランスの哲学者ミシェル・セール（1930-2019）は、『コミュニケーション』（1969）において *idéographique* と *signalétique* という二つの記号体系の区別を行った。発表者は前回の日本記号学会において「ミシェル・セール『ヘルメス』と記号」という題で発表を行い、その概念的実質を明らかにしたが、本発表では、この区別を踏まえ、その区別に基づくコミュニケーションをミニマムな局所構造として含むような、セールにおける記号論的な世界観を提示することを目的とする。

発表は三部構成を取る。第一部では、ミシェル・セールの紹介および前発表の内容の簡単な振り返りを行い、議論の前提を共有する。第二部では、初期セールにおいて、文芸批評と自動機械という異なる文脈で、二つの記号体系の区別と事実上同じ区別が用いられていること、さらにそのように領域を変えて同じ区別を適用することで、その区別自身の性格がより明確に分析されるに至っていることを論じる。まず文芸批評の領域においてこの区別が変奏されることで、記号単体だけではなく記号が組み合わせられて織りなされるテキストの水準においても有効な分析の射程を有すること、および *signalétique* な記号体系がヒューリスティックな意味合いを有していることが明らかとなるだろう。また自動機械の領域で変奏されることで、記号単体での表現力と記号群の組み合わせによる表現力の区別が要請されることにより、「情報量」というものに対するより深い洞察が得られることとなるだろう。

以上を踏まえ、第三部では、このような性格づけの異なる記号体系同士のコミュニケーションをその局所構造として有するような、セールにおける記号論的な世界観を明確化する。セールは博士論文『ライプニッツのシステムとその数学的諸モデル』（1968）において、ライプニッツの最善律の構想を百科全書的な記号体系の進展のプロセスとして見做す、という解釈を試みており、発表者はこの解釈を、「知の主体・記号体系・百科全書」という三つのアクターが、それぞれ対になり互いを増進させあって、最終的に三者すべてを多様で豊かなものにしていく、というヴィジョンを示すものとして解釈する。最後に、ライプニッツ解釈から導き出されたこのような記号論的な世界観は、ミシェル・セールと記号というテーマを論じるにあたって、ひとつの重要な参照点となることを述べる。

参考文献

- Michel Serres, *Le système de Leibniz et ses modèles mathématiques* (Paris : Presses universitaires de France, 1968)
- Michel Serres, *Hermès I La communication*, Editions de Minuit, 1969. 邦訳『コミュニケーション』〈ヘルメスI〉、豊田彰訳、法政大学出版局、一九八五年。
- 清水高志「ミシェル・セール『ヘルメス』の諸相」『情報デザイン研究』1.1 (2025), 5-13.